

8. 呼び声

塚原学園天竜高校一年 T・M

私が中部電力に勤務する父の転勤で、平岡小学校から、この智里西小学校に転校して来々から、もう六年経ちます。転校して来た時はまだ五年生でした。

Y・Oさんは私の家の前を通って学校に通うせいか、すぐお友達になりました。

どの頃から、Yさんは、学校へ行く朝は、いつも私の愛称「Tさん」を、大きな声で呼んでくれました。私もその声に家を出る一緒に仲良く登校し

たものでした。

中学になりました。私たちの地区は山の中、生徒数が少ないので、小中併設でした。小学校には分校があつて、中学になると、その人たちが入つて来ました。H・Sさん、C・Hさん、T・Hさんの三人でした。この新しい三人のお友だちと一緒に、Yさんは、毎朝私を呼んでくれました。

「Tさん、Tさん、とんぼ。」

と大きな声で呼んでくれ、五人で揃つて学校に通つたものでした。

あともう一年で、卒業したらああする、こうするといつたのですが、おそろしい梅雨前線豪雨で、あの六月二十七日夜に、Yさんは、たった一人であの永遠の旅に立ち去りました。

あの日、凄しい雨が、昼食をたべながら、担任のK先生が、

「Oさんの家は危いよ。」といわれるのに、

「私の家は危いの。」と隣の人に話しかけていました。

午後になつて、私たちは先生方に付き添われ、部落ごとに、緊急集団下校しました。横川川はもうあふれ、Yさんは出迎へのお父さんに背負われ、川を渡つていきました。

その夕方、Yさんは崩落する土砂のため、倒潰する家の下敷きになつて死んでしまったのでした。

翌日、殆ど同級生が、K先生も、私の家の前に集まったのですが、橋は流れ、道は崩れ、洞は抜け、どうしてもYさんの亡くなった所には寄りつ

けませんでした。

「 Y . O さんが死んだレ——でも、どれはまるで夢のようで、ヒマも信
じられませんでした。」

七月四日、やっと道や橋が何とか復旧されて学校が始まりました。それから
の毎日、私は Y さんの「 T さん」という声を待つていました。しかしど
の声は聞こえませんでした。何故 Y さんは呼んでくれないんだろうと思つ
て、よく考えてみると、ああ、 Y さんはもうこの世にはいなかったのです。
どれからの私は毎朝一人で学校に通いました。聞きなれた声を耳にしないと
何だかとても淋しいものでした。

もう二度と帰らぬ Y さん、どうか天国で安らかにお眠り下さい。私の良
き友であつたあなた—— Y . O さん。いつまでも私の良き友でいて欲しか
つた。

(三十八年)